白金薮

８月号

平成２７年８月発行　　第５４号

白金葭定例句会案内

九月十八日(金) 12:00～15:00 ア第三 兼題：芋嵐、衣被
十月十六日(金) 12:00～15:00 ア第三 兼題：愁思、落鮎
十一月二十日(金) 12:00～15:00 酉の市(熊手)、大根

月例句会報（'15／8／68名）（西新井大師、炎天寺吟行）

蟾蜍控に胡座炎天寺
萬国の蛙経上ぐ八月六日
炎天の真っ只中に寺は在り
門を入る馬頭観音汗拭ふ
一茶きっと鰻を所望蛙の寺

飯田孝三

軒先の風鐸夏の雲の中
菩提樹の緑陰に悟り開かんと
炎帝に萎れてゐたる牡丹の葉
南無大師遍照金剛首振る扇風器
ひろしま忌率ゐてゐて来る炎天寺

光成高志

女人堂に緋鯉口あけ滝の音
みんみんの大師炎天寺あぶら蝉
二十五菩薩籠めて暑しや栄螺堂
境内や涼しきものは塩地蔵
吹く風に秋風まじる原爆忌

増田陽一

二つある木魚艶やか大旱
仁王二体眼も埃炎天下
鯉の波立って目高の散らばれり
親善の鐘静かなり原爆忌(日米親善の鐘)
行きは紅帰りは白のさるすべり

光 みち

寄せ墓に縋りて蝉の殻脱げり
お大師へ二十世紀の梨供ふ
本堂の甍も油の如き照り
佛恩を享く菩提樹の緑陰に
一匹の蛙も鳴かず炎天寺

佐藤宏之助

御大師に七草活けて秋近し
白眼剥く阿吽の仁王酷暑かな
片蔭の店は客寄る草だんご
御仏はみな涼しげに在らせらる
三十歩で巡る霊場日日草

林　半寿

大師線のひと駅電車秋暑し
参道のだんご屋まめ屋秋渇き
稚児大師像ほのかに光り原爆忌
炎天の影に光れる波郷句碑
一茶いま句を詠むところ炎天に

仲本興正

本堂に秋の七草寄せ植えて
夏空や朱色の剥げた仁王像
本堂に六台回わる扇風機
実梅や朽木のベンチ鳩止まる
原爆忌猫の帰り来る朝あした

田宮敦子

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

5　境内や涼しきものは塩地蔵　陽一
5　三十歩で巡る霊場日日草　半寿
4　吹く風に秋風まじる原爆忌　陽一
4　御仏はみな涼しげに在らせらる　半寿
4　大師線のひと駅電車秋暑し　興正
3　本堂に六台回わる扇風機　敦子
2　御大師に七草活けて秋近し　半寿
2　二つある木魚艶やか大旱　みち
2　寄せ墓に縋りて蝉の殻脱げり　宏之助
2　白眼剥く阿吽の仁王酷暑かな　半寿
2　稚児大師像ほのかに光り原爆忌　興正
2　萬国の蛙経上ぐ八月六日　孝三
2　萬国の蛙経上ぐ六日かな　陽一
2　みんみんの大師炎天寺あぶら蝉　孝三
2　炎天の真っ只中に寺は在り　宏之助
2　本堂の甍も油の如き照り　高志
2　南無大師遍照金剛首振る扇風器　興正
2　参道のだんご屋まめ屋秋渇き　みち
1　仁王二体眼も埃炎天下　宏之助
1　佛恩ぶっとんを享く菩提樹の緑陰に　みち
1　鯉の波立って目高の散らばれり

1 門を入る馬頭観音汗拭ふ　孝三
1 一茶いま句を詠むところ炎天に　興正
1 親善の鐘静かなり原爆忌（日米親善の鐘）　みち
1 二十五菩薩籠めて暑しや栄螺堂　陽一
1 炎帝に萎れてゐたる牡丹の葉　高志
1 お大師へ二十世紀の梨供ふ　宏之助
1 原爆忌猫帰り来る朝の月　敦子
1 原爆忌猫の帰り来る朝あした
1 軒先の風鐸夏の雲の中　高志
一匹の蛙も鳴かず炎天寺　宏之助
炎天の影に光れる波郷句碑　興正
蟾蜍控に胡座炎天寺　孝三
女人堂に緋鯉口あけ滝の音　陽一
菩提樹の緑陰に悟り開かんと　高志
実梅や朽木のベンチ鳩止まる　敦子
行きは紅帰りは白の百日紅　みち
行きは紅帰りは白のさるすべり
片蔭の店は客寄る草だんご　半寿
ひろしま忌率ゐてゐて来る炎天寺　高志
夏空や朱色の剥げた仁王像　敦子
一茶きっと鰻を所望蛙の寺　孝三
本堂に秋の七草寄せ植えて　敦子

3 蟇・殿様・赤・牛蛙・炎天寺　陽一
2 一茶います足立六月極暑かな　興正
1 福蛙まんづ一撫で汗みどろ　孝三
1 滝の音千羽鶴ある女人堂　敦子
1 わくらばや池の柳の揺れ通し　みち
1 炎天寺の蛙百態白雨来る　陽一
1 炎天寺の蛙百態白雨待つ
1 青田みな埋め立てられて炎天寺　孝三
水子地蔵白さるすべり蒼ざめて　陽一
地蔵六体赤いべべ着て秋暑し　孝三
地蔵六体赤い前垂秋暑し
門入りて高砂百合の炎天寺　みち
金色の稚児大師合掌蓮蕾　高志
蝉鳴くや寺宝短冊見えたり　〃
古里を向く炎天の一茶像　宏之助
1 炎天ゆく緑の僧衣なびかせて　〃
1 青柿や子供が覗く橋の下　敦子
炎天の一茶像なり顔に影　興正
1 高砂百合萎れて二輪波郷句碑　半寿
団栗の樫の木深き蔭つくる　高志
炎天に不動の火焔ぼうぼうと　興正
炎天下筆乾きたる一茶の像　半寿
甘き梨噛んで広島思ひけり　〃

二回目句会の選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

1　池に群れ塩辛蜻蛉解るる音　　みち
とはいへど酷暑に耐ふるやせ蛙　　宏之助
炎天の炎天寺には石蛙　　敦子

一句鑑賞　　光成高志

稚児大師像ほのかに光り原爆忌　　興正

稚児大師像を拝んでいると仄かに光っているのに気づいた。稚児大師と原爆忌と関係付けた。無関係のようで、原爆で亡くなった子供たちと、ほのかに光る子供の空海像とが目に見えぬ糸で結ばれていると思う。確か金色のレリーフの形をした少年像でした。幼名は眞魚と書いた札が立っていた。被爆が元で12歳でなくなった私と同い年の少女、その子の像、沢山の折鶴が供えてある像を稚児大使眞魚が悼んでいるのだ。それがほのかに光る証なのだ。空海が悟りを開いたという室戸岬の洞窟での光りと海、亡くなった多くの魂に未だに稚児大師が金色の光りを反射させて語りかけているのです。ほのかにの措辞も効いていると思います。

みんみんの大師炎天寺あぶら蝉　　陽一

ミンミンゼミは「ミーンミーンミーン・・ジジーー」これを繰り返す。ミーンミーンと鳴いているときは尻を上下に振動させている。ジジーーと伸ばしている時は静止している。アブラゼミは「ジージリジリジリ・・・ジーンジーンジーン・・」とこれを繰り返す。ミンミンの方が少し涼しい感じがする。アブラゼミは夏のBGMかのような記憶があって暑く感じるのかも知れない。掲句はその鳴声と寺の特徴を関係付けて、言われてみると合点々々と膝を打つ。あの猛暑の日の西新井大師・炎天寺はこの句で長く記憶に残るに違いない。

御仏はみな涼しげに在らせらる　　半寿

吾ら人間は気温35℃の中を息も絶え絶えに御大師様にお参りしに来た。本堂に並ぶ御仏様、屋外の地蔵様観音様大日如来様みな涼しげに在らせらる。「**境内や涼しきものは塩地蔵**（陽一）が当日の最高点。みな血の通ってない仏様だからとみもふたもないことを言ってはいけない。それはここ三百年来の科学的思想に過ぎないのだ。神様仏様に使われる敬語のなんとうつくしいことか、これも、この句でよくわかる端正ないい句です。

三十歩で巡る霊場日日草　　半寿

富士山登山は大変なので、富士塚を作って登り浅間さんを祀り、そこへ上ることで富士山に登ったつもりになる。関東地方にはこのような富士塚が結構多い。この三十歩で巡る霊場は四国八十八カ所札所を寄せて造ったミニ八十八札所である。最近できたらしくみかげ石で札所の名前が刻み込まれた石柱が88本立っている。中央の山には弘法大師像が聳えている。そういう霊場である。近

くの花壇には日日草が咲いている。暑さに強い日日草は札所めぐりの花に相応しい。この季語の斡旋がこの句の成功の源である。こういう句を作られる半寿さん今ほんとに俳句が楽しいに違いない。

炎天の真っ只中に寺は在り　　孝三

炎天寺のあり様を把握された堂々たる句。「蝉鳴くや六月村の炎天寺」（小林一茶）を踏まえて、遠く前九年の役当時の逸事から村の名を六月村と改め、寺の名を炎天寺と改めたという歴史にも遡れる句である。最近の昭和四十年の写真が部屋に飾ってあったが、炎天の真っ只中にパセリほどの緑の中に八幡様と炎天寺があるのであった。寺の存在感をよく表した佳句。

炎天寺吟行寸描　　増田陽一

寄せ墓に縋りて蝉の殻脱げり　　宏之助

西新井大師境内での所見。「寄せ墓」は無縁仏のことが多いという。その集まった墓石に縋るように多くの蝉が殻を脱いでいる。何だか死者の魂が年毎に蝉の姿で地中から現れて、嘗てのかと生を懐かしむようである。寄る辺ない無縁仏の魂を感じさせるのは「縋りて」という措辞の作用であろう。

萬国の蛙経上ぐ八月六日　　孝三

当日は原爆忌の日、その惨禍を悼んで、日本のみならず「萬国の蛙」がお経をあげる、というのである。炎天寺境内にある蛙群を配置した池に触発された句であろう。原爆忌でこのような滑稽味のある句をほかに知らない。滑稽と同時に、「蛙」は例えば草野心平の詩の世界では草莽、民衆の比喩であった。政治家、投下国の関係者は知らず、ただ被害者である万国の民衆は等しく戦争に抗議と追悼の祈りを捧げる、と言っているのだ。さて英語で「経」は何だ？と引くと sutra と出て余り実感がない。ここは聖書でもコーランでもいいから原爆廃棄を切実に祈りたい。

大師線のひと駅電車秋暑し　　興正

初めて行った僕はこの「大師線」が西新井大師一寺のためにあることに驚嘆した。「ひと駅電車」の措辞がこの珍しい敷線に乗ってすぐ降りる、何か、空虚感とでも言う感じを表している。当日は東京で35.5度の熱気であったというけれど、その中に微妙な秋の気配も確かに感じられた。この「秋暑し」がとても効果がある。

軒先の風鐸夏の雲の中　　高志

本堂の大屋根であろうか。眩しい夏空を仰げば、暑熱でくらくらする眼に軒の風鐸が雲の中に浮ぶように感じられた。建築の壮大さと明るい夏雲の印象が強く出ている。

御仏はみな涼しげに在らせらる　　半寿

この日、異常な暑さに喘ぎつつ（僕だけか？）の吟行であった。その中で西新井大師の広い境内に散在する仏像は俗界を見下ろしてどれも涼しげである、という感覚。仏様は悟りを開いているのだから涼しくて当たり前であるけれど、事実、「塩地蔵」といい、湯殿山のを勧請したという大日如来といい、スリムないい形をしていた。

仁王二体眼も埃炎天下　　みち

西新井大師山門の仁王は埃まみれ、剥落しかかった姿で白目を剥いていた。極暑のなかで門を守っているのも御苦労の姿であった。「二体」「眼も埃」の描写がリアルで、炎天下の古びた仁王像を活写している。

原爆忌猫帰り来る朝の月　　敦子

失踪した飼猫が帰ってきたというのであれば愛猫家にとっては大事件で、折りしも八月六日であったと特別な感慨もあるだろうけれど、単に朝帰りする猫に出会った、と見るのも「朝の月」生きるかな、と思った。

一句鑑賞　　飯田孝三

二つある木魚艶やか大旱　　みち

西新井大師本堂での嘱目である。川崎大師とともに、厄除開運の霊場として関東七ケ寺の中心。さすが弘法大使ゆかり、木魚も左右一対、破天荒の酷暑つづきの最中にあって、共々、艶やを極める。殊更あらたかなご功徳が請合いである。「二つ」が臍。「艶やか」と「大旱」の照応が巧まぬ俳諧を滲ませ、めでたい。「大」旱が天地をとりこみ磐石の効目。

お大師へ二十世紀の梨供ふ　　宏之助

「二十世紀」は梨の名。その瑞々しい甘味をもって、ひと頃の梨の王者。近年は、品種改良目まぐるしく、紛らわしい名ばかりだが、「ニジフイチセイキ」は韻きも実に添い涼しげでいい。九世紀の高僧と二十世紀の梨の取合せに味わい。飯島晴子にも孔子と梨の句があるが、梨は高僧、聖哲によく似合う。これが桃だったら、お大師さまも面食らうだろう。

大師線ひと駅電車秋暑し　　興正

大師線は、東武線西新井駅から分岐する一駅路線、今では住宅・商店に囲まれているが、もとは、お大師さま詣でのためのお誂え線。当日は八月六日、立秋直前だが、あえてちょっぴり前倒し、「秋暑し」と天象を配したのが憎い。各地で老若の熱中症が続出する異常気象だが、ふつと感じる涼気、雲のたたずまいに酷暑の裡に秋を感じるのである。「秋近し」、「秋隣」では句にならぬ。

本堂に六台回わる扇風機　　敦子

南無大師遍照金剛首振る扇風器　　高志

状景はなんの説明もいらない。本堂の天井に扇風機が

六台回っている。見たとおりだそうだが、「六台」が曰くあり気、臍である。仏の教えには疎いのだが、「六道」にかよい、衆生の業をひたすら冷まし賜う風情がある。（敦子さんの句）　ありがたやありがたや、南無大師遍照金剛・・天井隈なく首ふり回す扇風機六台。前句が客観で徹しているのに対し、「首振る」擬人詠で、天地、聖俗を取り込み人間の息を通わしている。ひたすら教を上げる善男善女の姿が見えてくるから不思議。（高志さんの句）

境内や涼しきものは塩地蔵　　陽一

ご存知一茶の痩せ蛙の句で知られる、炎天寺の境内である。かつて蛙の寺も、ぐるりの青田はすっかり埋め立てられ、境内ときたら、コンクリ固めの小池に陶の蛙をあれこれ配置する限りである。折から地球規模での異常気象、記録破りの熱暑つづきの最中、清らな盛塩を置くお地蔵さまだけが、一吹いっすいの涼気を賜うのである。「は」が臍、手練である。

三十歩で巡る霊場日々草　　半寿

お遍路は空海の修行遺蹟、四国八十八箇所の霊場巡拝。お大師さまやゆかりの名刹ではそのミニチュア版を設え、霊場に擬えた甃石を踏ませ、ご遍路なみのご功徳をお授け賜るのだ。子供の頃から詣でた西新井大師にもそんなのあったかな。とまれ、「三十歩」と「日々草」との平仄の可憐さがめでたい。「ニチニチソウ」の響きが善男善女の足取りを彷彿させる。

吹く風に秋風混じる原爆忌　　陽一

当日は八月六日。七十年前のその日、広島に原子爆弾が投下された。その悲惨は年々語り継がれてはいるものの、実地を踏んで、知る者は減った。「秋風まじる」は、時の移ろいと人の心の変りように思いを馳せるのである。（出句一覧掲載順）

（二次句会）

青柿や子供が覗く橋の下　　敦子

景物、人物の位置関係がよく分らないのだが、惹かれていただいた。門川に垣内の青柿が映っているのかな。子供が下を覗く橋際に青柿が垂れているのなら、～「子供が橋の下覗く」かな。当日異色の吟行句。（西新井大師の境内にこんなところがあったのかな、だとすれば、橋は心字池に架かるか。）

炎天寺の蛙百態白雨去る　　陽一

当日の吟行参加者はご存知だが、境内や本堂内に、地元産、万国渡来の「蛙百態」が盤踞（失礼）。沛然と到る「白雨」が堂塔を丸呑み、寺領一帯を、一気に、銀しろがねに染め上げて去る。庭、堂内の「百態」をもって、白雨が覆う広景を演出したあたりが見所。庭先の雨脚描写ではない筈だ。俳句は本当より本当らしく嘘をつく。夕立もありうるが、「白雨」の情趣をあてこんだのである。は

たまた中七以下、五ア音踏韻の妙を目論んだか。炎天寺「の」は「に」もあるだろうか。

炎天の炎天寺には石蛙　　**敦子**

「炎天寺」の名は、まるで、この日のために付けられたような炎天は、閻魔様も舌を巻く灼熱地獄ぶりである。前述、昔ぐるりの青田はびっしり埋め立てられ、堂前はコンクリ固めの小池周りに、蛙は、どれも石蛙、陶蛙の蹲踞。「住職はややに太っちょ蛙の寺」（三泥）

（出句一覧掲載順）

ハガキ句（53）報管見〉　　飯田孝三

春風をゆっくり送る象の耳　　**羊三**

「送る」が発見。あっぱれ、けだし句の眼目である。「ゆっくり」が春風の本姿を目に見せ、春の気があふれる。春風駘蕩。なるほど、春風は象の耳が扇いで起こす。春風と巨象の量感との対照がのどかだ。散文調が、不思議に、俳諧に輪をかける。俳句をやらない荊妻によれば、「まるで、まどみちおさんの世界」。「春風やはたりと掲ぐ象の鼻」（孝三）。

鼻唄の潮来笠出て目刺焼く　　**敏子**

「潮来笠」は、たしか「潮来花嫁さんは船でゆく～」。「潮来笠」と「目刺焼く」との取合わせが妙。～「て」の弾みが唄のリズムに通い、目刺を焼く手馴れの指捌きが見えてくる。目刺は庶民の食物、「目刺焼く」は、つつましい生活の味わいが身上、目刺の“にがみ”がうまみで、感慨の焦点とか。歳時記の例句も「みつつかなし目刺の同じ目の青さ」（秋邨）、「寄る辺なき校僕一人目刺焼く」（松野鶏巣子）など、身につまされるのが多い。

対して掲句、生活の活気が満ち、明るい。本情に添いつつ常套を抜ける。外光あふれる潮来笠のイメイジも重なって、春気みなぎり新鮮だ。「村起こしの催で、目刺を焼いて振るまうのかな」ともらす、と、傍らの荊妻曰く、

ハガキ句53報（H・22・3・18）

予報士の早口三寒四温かな（2／5）　孝三
鬼やら不鬼のパンツの同じ柄　（〃）　〃
羽裏見せ表も見せて群千鳥　かづひろ
春風をゆっくり送る象の耳　羊三
蜑ケ家の帋燈やほのと吊雛　〃
茶畑を水平飛行雉飛べり　ひろし
黒々と濡るる遅日の犬の鼻　璃子
雲充つることも寂寞春の丘　星子
からからと絵馬の吹かれて大試験　春美
冬帽のファーブル現るる昆虫館（小熊座一月号）　陽一
鼻唄の潮来笠出て目刺焼く　敏子
開花日の予想を競ふ西行忌　高志

「ばかね、非老人のキッチン風景よ。男も厨房に立つの」。むべむべ。庶民の今様リヴィング風景のワンカットである。なるほど、「鼻唄」が臍である。

開花日の予想を競ふ西行忌　　高志

今年からＮＨＫはさくらの開化予想をやらない。三月が近づくと、連日、民間各社がテレビの画面で、こまごま、各地毎の予想を競い合う。花の下なる一期の満願を果たしたのは、西行だが、歌聖にかなう的中率を上げて西行賞の栄に輝くのは、さて、どの社だろう。西行忌にあやかり、知をさらりと抜けた諧謔がこぼれる。

黒々と濡るる遅日の犬の鼻　　璃子

犬の鼻は黒い。加齢で褪色して白む。黒々と濡れ光るのは、青壮、健全、元気いっぱいの証。それにしても、犬ども、昼、よく眠る。まして春。「えぇ、散歩するんですか…？」、上目遣いに主を見あげる、黒濡れの鼻面と訝る眼差しがまざと目に浮ぶ。さりげない季語斡旋が的確。手練。犬は、ひとの心裡をすばやく察知し、愛情に応えようとする、賢く、優しい動物である。作者の「遅日」の思いをどう受けとめたのだろう。

冬帽のファーブル現るる昆虫館　　陽一

ところは千駄木の「昆虫館」。館内に蝶その他昆虫の沢山の標本や資料が所蔵・展示され、ファーブルの原著や館主の同翻訳書、著作が並んでいる。日頃、ファーブル会の人達や参観者で賑わう。さしもの館内も、冬は、参観者が減り、ひっそりしている。そんな気配をつたえるのが「冬帽」だ。ふと、そこに、黒い山高帽・フロックコート姿のファーブルその人が現れる。作者は、そんな気がしたのである。（昆虫館には、二度、訪れたが、ファーブルについては、昔、『昆虫記』ジュニア版を、そこそこ読んだ程度で、殆ど知らない。見当違いを憚りながらの管見である。）

羽裏見せ表も見せて群千鳥　　かづひろ

光景が彷彿。～「も」は、～「を」もあるだろう。後者は、飛翔の迅速が主眼。前は、瞬時、眼前の鳥の姿態に焦点。はて、「群」千鳥に適うのは。

二股の松それぞれに菰巻かれ　　圓子

二股の貫禄、松に如くはない。ともどもに菰で介抱されている。その滑稽が見どころ。作者は、なにか寓意を込めるのだろうか。

からからと絵馬の吹かれて大試験　　春美

絵馬が吹かれっきり、身につまされる。受験士は風に弄ばれるばかりだ。～「て」は、「ぬ」で切ったらどうだろう。一期の大試験と、その明暗を占うかの、風に鳴る絵馬との取り合わせが句に奥行を齎すのではないか。

茶畑を水平飛行雉飛べり　　ひろし

子供の頃、身近に雉の鳴声を聞いたり、家の裏山で足元から雉に飛び立たれたりした。が、その飛びざまの記

憶はなく、生態や習性を知らない。茶畑の上面を低飛行したのだろう。が、「水平“飛”行」、「“飛”べり」が目ざわり、喧しい。さては、そこに羽音の演出効果を目論んだか。であるなら、周到な計らいだが、そうではあるまい。足元を飛び立つ羽音なら別、近からぬ視野をゆく、雉に羽音は馴じまない。美形の鳥、雉の飛び姿に刮目した視覚の句だと思うから。

蜑ケ家の帋燈やほのと吊雛　　羊三
雲充つることも寂寞春の丘　　星子

ともに情景は見える。前句はタイムスリップしたようだ。後、「寂寞」は言わずもがなでは。大仰。好尚を分けるところだろうが。

妄言深謝

（駄句近作）

花筏棹させば水流れたり
天守閣は梢のとつ外れ桜騒

（平22・04・26）

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭七月号頂きました。カラーの表紙すばらしいですね。長屋さんとの交流もありよかったですね。私は相変わらずハガキのやりとりをしています。昔の白木屋から東急百貨店で内装の仕事？をしておられたやうです。五周年記念、資金面はお示し下されば協力させて下さい（今年は余裕があります）益々のご発展を祈ります。

（7／24　小山陽也）

炎天寺（吉野秀彦様）

句会途中ああいうことになり大変失態を致しました。ご心配をおかけしました。ＦＡＸではどうかと思いましたが、便利さに負けて、あれからのことお伝えしますのでご勘弁下さい。・救急車で苑田第一病院にすぐ入りまして、ＭＲＩを撮りました。診断が確定し、そこでは対応できないということで、・駿河台の日大病院にまた救急車で転院しました。精密検査をする間もなく、緊急手術をするということで、何通もの同意書にサインをしまして・夜八時過ぎに手術室に入りまして、出て来ない来ない、朝３時前にやうやく出て来ました。・今日（金）午後普通病棟に移動できる連絡をもらいました。以上があれからのみちさんの病状を見守った私の報告です。肝腎な病名のこと、・急性頚部硬膜外血腫です。・血腫が脊髄神経を圧迫して右手の痺れ、右足の痺れ、麻痺を起こしたとのこと、これをとりあえず除去する手術を行ったのです。・明日（土）造影検査をするといわれました。（出血の部位を特定するのではと思いますが、私の推測です）・11日の火曜日に執刀医師より説明するといわれました。以上が今までの状況です。今日は病院に置いて家に帰りましたが、喋れるし私のことを逆に心配されて恐れ入っており

ます。娘と倅から、暑い最中連れまわすからと怒られました。親なんだから敬語を使えというのが精一杯で、今は冷静に反省しています。秀彦和尚様には貴重な短冊をお見せ頂き大変ありがとうございました。あの時私がもたもたしているのを見て、奥様には直ぐに119番していただきお蔭ですみやかな処置ができたものと思います。都の消防庁の対応も速やかで駿河台まで一時間たらずで移動できました。句会の編集を担当していますので、それはそれで完結して「白金葭」八月号として発行いたしお送りいたします。以上まことにありがとうございました。

（8・7　光成高志）

（このような処にこのような文章を掲載するのもどんなものかと思いましたが、私は詩の実とこの世の実を行ったり来りしている者として、この世のことをありのままをお伝えするものです。8・13（木）にカテーテル検査をして様子をみると担当医師から説明を受けました。みちさんは、今は以前のような元気を取り戻しております。最近こういうことになる予感があったと私に申しました。連合いとして生活していますが、人間はやはり数学で云うデスクリートだと実感しました。高志）

ＦＡＸを拝受しました。びっくりしました。手術を終えられ、今日は普通病棟に移れるとのこと、又、高志さんをご気づかわれているご様子で、まずは、ほっといたしました。ご本人が大変だったのは、もとよりですが、高志さんも、随分お疲れだと思います。これからも、何かとご用が重なります、お体に気をつけてください。敏子さんが早く回復されますよう切にお祈りいたします。お疲れでへとへとでしょうに、早速お知らせ下さいまして、有り難うございました。昨日、今日と電話では、いらっしゃいませんでしたので、気が気ではありませんでしたが、ご様子を伺えて、ひとまづほっとしました。どうか、敏子さんはご養生を専らに、又、敏子さんのためにも、貴兄も体をくれぐれも大切になされますように。俳句のことは、この際ご放念ください。

（8・7飯田孝三）

大変だったですね。硬膜下出血は私も経験があります。私は脳に血がたまり神経を圧迫すると言われました。みちさんお元気そうでなによりです。お大事にしてください。高志さんもお体に気をつけて下さい。（8・7敦子）

大変でしたね。電話等して良いものかどうか、悩んでおりました。ちゃんと喋ることが出来るようですし、大事に至らなかったと推測され一先ず安堵致しました。つい最近、兄が脳梗塞で入院した話をしておりました。その話が頭にあり、すぐ救急車を呼ぶべきと思いました。集合時間の一時間以上前にお出で頂いていたとお聞きしました。やはり、暑さが引き金になったのでしょうか。

呉々も、お大事になさって下さい。細かな話ですが、

帰るときに、和尚さんにコピー代を精算させて下さいと申し出ましたが、固辞されました。　（８・７林半寿）

お疲れでしょう。ご自身の事にも御留意下さい。先程、宏之助さんから、電話頂き、再度報告を受けました。そこで、第２句会の選句を送るようにとのことでした。今は、その様な状況でない気がしますが、貴兄の俳句に対する姿勢も尊重し、送らせて頂きます。呉々も、奥さまの事を最優先にお願いいたします。林半寿選１、１８、２２、以上３句宜しくお願いいたします。

（８・７　林半寿）

猛暑の中おつかれさまでした。何から何までのお手配を多謝。残念なことは、敏子さまが体調を崩されたことでしたが、幸いにしてお寺の中だったので安静にしておられたのでよかったですね。素早いお寺様の対応に心より感謝申上げます。一日も早いご完治を祈ります。

（８・８佐藤宏之助）

前略　FAX拝見いたしました。全てが好転し始めているようで安堵いたしました。これも奥さまの勇気あるＳＯＳの発信があればこそと考えております。きっとまだまだ、家族と一緒にいたい、俳句仲間と句を作りたい、そんな思いが根底にあっての発信であったような気がしてなりません。奥さまの全快をお祈り申し上げます。また光成さまが草臥れては奥さまががっかりなさいます。看病には体力が必要です。くれぐれもご自愛ください。

白金葭の句会も一ラウンドは終了していた旨、伺いました。その続きはまた炎天寺を会場にご計画下さい。その時は私も句を出しましょう。合掌（８・８吉野秀彦）

ベランダに宇宙の匂い胡瓜の蔓　　秀彦

前略　今朝ほど孝三兄からみち様の突然のご病気を伺い驚きました。連日の酷暑に加えて日頃のご多忙が重なったせいでしょうか。九月の句会にはいつものように元気なお顔を拝見できますよう一日も早いご快癒をお祈りいたします。高志様にも十分ご健康にご留意下さいますよう願い上げます。忽々　（８・10武者昭七）

高志様大変でしたね。あれから小生なりに心配しておりましたが、何分にも救急車でしたから、いろいろとお忙しいと思い、お問い合わせを遠慮いたしておりました。手術されるという事態になられて、ご本人様はもちろんのこと、高志様も大変な思いをされましたこと、心よりお見舞い申し上げます。吟行に関しましては、私どもはありがたくお世話になるばかりでしたが、事務局という立場の奥様は大変な気苦労がおありだったと、今更ながら思い至りました。申し訳ない気持ちです。当分は奥様のお身体に留意されることを願いつつ、高志様ご自身も無理をなさらないよう、くれぐれもお願いいたします。奥様の一日も早いご快癒を心より祈念申しあげます。お

知らせありがとうございました。　（8・10興正）

（皆様の温かい励ましの手紙を入力していまして、ここに来て泪しました。パソコン作業で初めての体験です。東京都消防庁の救急隊の皆様にも思いを致し感謝の気持で一杯でございます。高志）

先日は大変お世話になりました。敏子さん如何かと心配しております。暑さのせいもあったことでしょう。くれぐれも御大切に。　（8・12　増田陽一）

残暑お見舞い申上げます。酷暑の中ご健吟のご様子お屁び申し上げます。白金葭は立派な句誌、東京クラブ会報は単にその日の出句を取りまとめたに過ぎず、ご覧頂くのも忸怩たる思いでございます。遊び句会でお互いの句も褒めるばかりで皆さんはどうか、私は何かと言いたいことが多いのですが、これはこれ、和やかなる事が身上なのでしょう。結社二つ（二十年以上と十年）に所属していた頃は、人間関係や、さまざまありました。六十年もつかず離れずよくもまあ句を作って来たと思います。さて　炎天寺吟行句会いかゞでしたか。お誘い下さっても参加できず、何年か前に行ったことを思い出しました。お寺の掲示板に沢山の俳句が展示され、境内に蛙の置物が沢山あったように思います。町が大変綺麗でした。記憶があやしく蕪村？一茶？が立ち寄った寺と思いましたが・・・。九十二才ともなると懐古に傾き、話の合う相手が居なくなるのでつい〳〵手紙のおしゃべりお許し下さいませ。御身ます〳〵おいとい下さいますように。ごきげんよう。　高志様　8／10　璃子

みちさんの経過が順調のご様子でほっとしました。高志さんも疲労困憊のかぎりと拝察します。何よりも、みちさんのごケアとご自身の健康管理を大切にして下さい。遅ればせで恐縮ですが、鑑賞の拙稿のお送りします。二次句会の分は、作者不明のまま、管見を記しました。

（8・13飯田孝三）

受贈誌（H27年8月号）

羽化終へし熊蝉蝉のブルドッグ（彩124号）　平野ひろし
敗戦忌湿度九十六以上　（〃）　〃
富士塚を蟻駈け上る駈け降る　（〃）　〃
板の間に吸いつく足裏夏来たる　（〃）　清野かつ江
・田水張るムー大陸がああ沈む　（〃）　貫名弘子
殊更に浦賀水道卯波立つ　（あすか8月号）　山尾かづひろ
夏草や古墳の丘へ螺旋道（東京クラブ8月）　文男
桐一葉あるがままなり風の道　（〃）　璃子
客絶えし渓の風鈴鳴りにけり　（〃）　万世遊
独り居に人ゐる気配夜の秋　（〃）　璃子
電柱に夕日の残る秋の蝉　（〃）　理佳江
秋立つや禰宜の袴の水浅黄　（〃）　璃子
夏萩や細き腕の菩薩像　（〃）　武子

こだま

現俳ブログ俳枕　江戸から東京へ（240）山尾かづひろ著

怖おづ怖おづと舳先紅蓮白蓮　飯田孝三
蓮見舟天気晴朗なれど波高し　光成高志

彩124号　平野ひろし主宰抜き

花びらの重なり捲れ薔薇開花　光成高志
釣られたる鮎に交代囮鮎　〃

恋の歌を読む　その四　武者昭七

君に恋ひいたも術すべなみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも　（五九三）
相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づくがごと　（六〇八）

ともに万葉集四にかかげられた笠郎女かさのいらつめという女性のうたです。郎女の伝記は不詳のようですが大伴家持にひかれてせっせと恋歌を送りました。万葉に収められた二九首全部が家持あてのものですが家持からの反応はつめたかったようです。二首目のうたからもそれがうかがわれます。「恋ひ」はあるひとりの異性に気持ちも身もひかれる意味で、奈良時代の用法ではこのように助詞「ニ」で受けた。古代人は異性にひかれることを受け身のこととみていたからだといいます(岩波古語辞典)。「いたも」は程度の普通でないこと。ひどく。「すべなみ」は「すべ」がないので。あなたに身もこころも惹かれてしまってどうにもならないのでわたしは奈良山の小松の下に身を寄せてなげくばかり。かなしいことです、というのです。

「奈良山」は平城京の北に横たわる低い丘陵。近江や北陸に通じる大事な街道。家持の邸宅はこのあたりにあったとか。とすれば郎女は切ない胸の内を山上から投げかけたことになります。昭和に入って、節付けされてよく知られた歌に北見志保子の次の歌があります。奈良山は恋の山でもありました。

ひと恋ふは哀しきものと奈良山にもとほり来るつつ堪へがたかりき
いにしへも夫つまに恋ひつつ越えしてふ奈良山の路に涙おとしぬ

二首目。自分が思っても思ってくれない冷たい人を思うなんて大きな寺にある餓鬼の像を後ろから拝むみたいなもんサ、なんの功徳もありゃしないという意味です。自分で自分のどうにもならない気持をちゃかしているようなおかしさとかなしさとがまじりあっています。郎女は醒めた知性の持ち主でもあったのでしょう。

恋の歌を読む　その五　武者昭七

朝影に我が身はなりぬ玉かぎる仄かに見えて去にし子ゆえに

万葉巻十一・二三九四　柿本人麻呂歌集

折口信夫はこの歌をこんなふうに口語訳しています。「自分の姿は痩せて、しょんぼりしてしもうた。僅か逢うたばかりで行ってしもうた人だのに、その人のために。

（口語万葉集）」うたい手の気分をよく抑えた名訳だと思います。

「朝影」は朝日にむかったときに地面にできる細々とした影。痩せ細った我が身のさまを嘆いているのです。「玉かぎる」は玉のように一瞬光る意味で「仄かに」を導く枕詞。光のようにほんの一瞬だけ目にとめた子のせいで。「子」は「子供」ではなくて、男性が気に入った女性を呼ぶのに使う語です。今流にいえば「あのこ」というところでしょう。

一瞬すれ違っただけなのにその面影が焼き付いて忘れられない女性というのがあるものです。そんな女性のために我が身はかげのように痩せ細ってしまったと嘆いているのです。そんな場合、男性が思い慕っている女性というのは現実の女性ではなくてこころのなかで聖化された存在であるというのが本当かもしれません。恋の「あはれ」はそんなところにあるのではないでしょうか。古今和歌集によく似たうたがあります。

恋ひすれば我が身はかげとなりにけりさりとて人にそはぬものゆえ

巻十一　読み人しらず

「さりとて」は逆接の接続助詞で、「そうは言ってもやはり・・」の意。「恋やつれでわが身が影のようになってしまった。ホントの影ならばあのひとの身に添えようがそうではないからやはり添うことができないのが悔しい」という意味。理屈の筋は通っているものの筋張っていて情感にとぼしいのが残念です。

白金葭　第54号　平成27年8月発行
編集・発行人　光成高志（TEL & Fax 04-7187-1068）
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2―14―17
表紙の題字：加納綾女。写真8月16日の白金葭

我孫子日記

7/17	例会
7/25	ひろしま観る
7/30	西新井炎天寺 ＊
7/31	秋本梨園
8/6	＊2 吟行句会
8/6	日大病院付添い
8/7〜8/15	＊3 病院通い

＊　坊さんは皆偉丈夫なり扇風機　　高志

*2　百日紅炎のごとく咲いてゐる　　〃

*3　どんぐ〜と処置の進んで秋となる　　〃

　みんみんや病院通いの甲賀坂　　〃

編集後記

かなしいかな、うたの実まことに楽しまんとすれど、人はこの世の実まことに生きねば生きられぬ。今月それを骨身

に知らされた。便り広場に書きましたようにみちさんが倒れて肝を冷しました。速やかに治療ができて運よく元気になりました。私からとり急ぎ御礼申上げます。いつか別れが来るのは覚悟していますが、妻のことでも業平の歌が身にしむものとわかりました。